

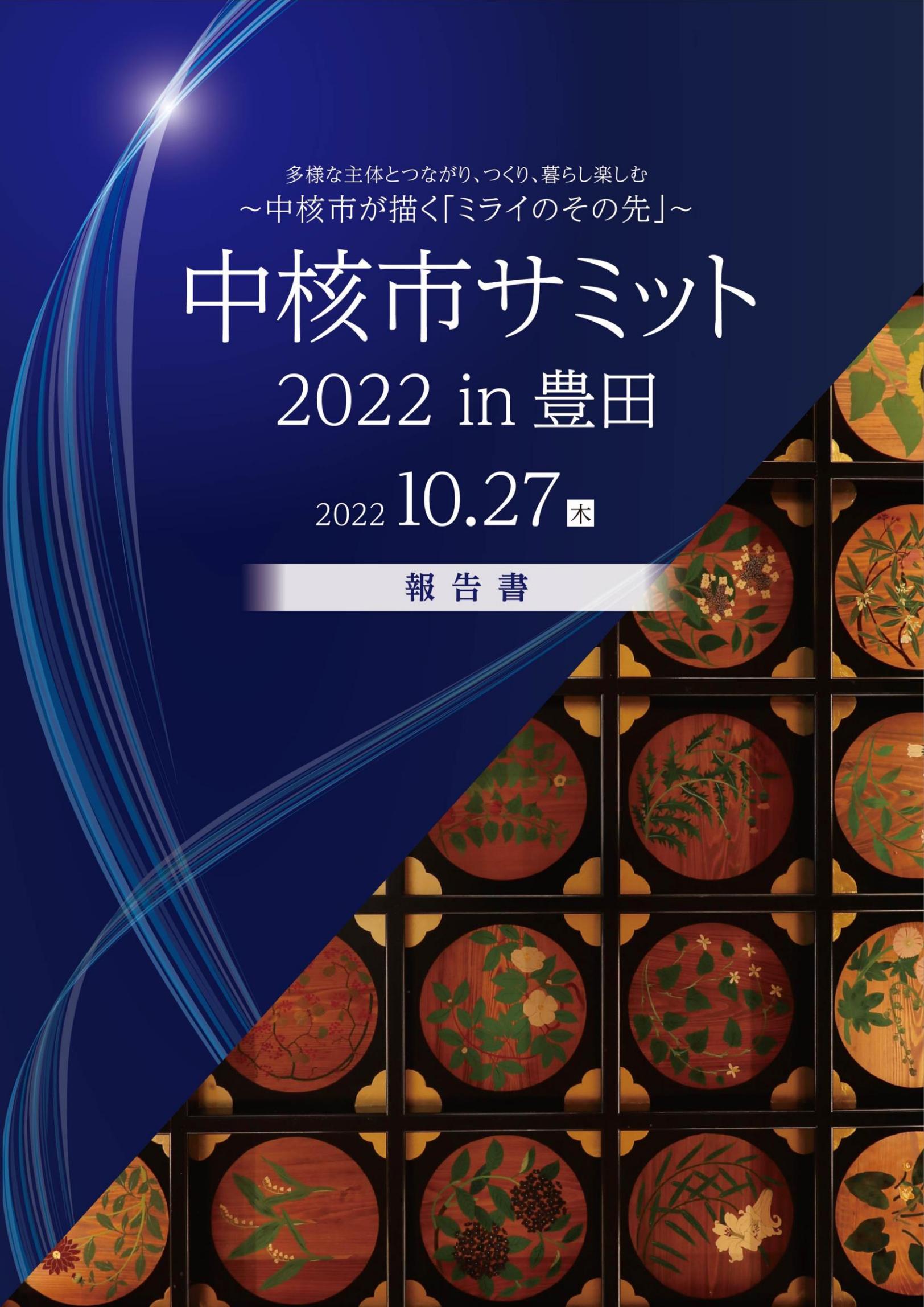
多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ
～中核市が描く「ミライのその先」～

中核市サミット

2022 in 豊田

2022 10.27 木

報告書



目次

記念写真	1
主催者歓迎挨拶	2
開催市歓迎挨拶	3
来賓祝辞	4
基調講演	8
パネルディスカッション 第1会場	20
パネルディスカッション 第2会場	22
中核市サミット豊田宣言2022	24
次回開催市挨拶	25
閉会挨拶	26
会場写真	27
開催概要	28

▶ 記念写真

多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ ～中核市が描く「ミライのその先」～
中核市サミット 2022 in 豊田



呉市副市長
小松良三

高松市副市長
加藤昭彦

宮崎市長
清山知憲

鹿児島市副市長
松山芳英

船橋市長
松戸徹

八王子市長
石森孝志

横須賀市副市長
田中茂

金沢市副市長
山田啓之

豊橋市副市長
森田康夫

豊中市市長
長内繁樹

一宮市副市長
山田芳久

岡崎市長
中根康浩

西宮市長
石井登志郎

下関市副市長
三木潤一

松山市副市長
松原剛史

高知市副市長
松島研

長崎市副市長
武田敏明

いわき市長
内田広之

宇都宮市副市長
酒井典久

川越市副市長
栗原薫

越谷市長
福田晃

尼崎市長
稲村和美

奈良市長
仲川げん

吹田市市長
後藤圭二

岐阜市長
柴橋正直

甲府市副市長
奥原崇

松本市市長
臥雲義尚

倉敷市長
伊東香織

姫路市長
清元秀泰

郡山市副市長
村上一郎

福山市副市長
中島智治

盛岡市長
谷藤裕明

東大阪市副市長
川口誠司

青森市長
小野寺晃彦

寝屋川市副市長
市川克美

長野市長
荻原健司

八戸市長
熊谷雄一

山形市長
佐藤孝弘

水戸市長
高橋靖

大分市長
佐藤樹一郎

同志社大学社会学部教授
永田祐氏

豊田市議会議長
板垣清志氏

豊田市長
太田稔彦

中核市議会議長会 会長
大野忠之氏

中核市市長会 相談役
一般財団法人地方偽協会 会長
香山充弘氏

日本大学文理学部 情報科学科 助教
次世代社会研究センター センター長
大澤正彦氏

総務省 自治行政局
市町村課長
田中昇治氏

高槻市長
濱田剛史

名古屋大学 名誉教授
山田基成氏

有志団体 Dream On 代表
中村翼氏

福島市長
木幡浩

枚方市長
伏見隆

松江市長
上定昭仁

▶ 主催者歓迎挨拶

中核市市長会会長 高槻市長

濱田 剛史

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました、中核市市長会会長を仰せつかっております高槻市長の濱田剛史です。

まずは、太田市長様をはじめ職員の皆様方におかれましては、このような素晴らしいサミットを開催していただきまして、誠にありがとうございます。また、公私何かとお忙しい中、ご来賓の皆様方にも多数ご出席いただきました。華を添えていただきまして本当にありがとうございます。そして中核市の市議会議長さんをはじめ、議員の皆様方、関係者の皆様方も今回のサミットもたくさんご出席いただいております。本当にありがとうございます。

さて、新型コロナウイルスは日本の最初の感染が確認されてから、早3年近くになろうとしており、中核市の真価を問われた期間であったと思っています。

我々中核市市長会は、地方分権、そして権限移譲を中心に国に提言をさせていただいておりますが、当たり前の話ではありますが、権限移譲というのが、責任、義務を伴ってくる、しかも非常に重い責任を伴ってくるということを改めて実感した、そんな3年間でありました。様々な課題も見えてきましたし、いろいろな分野で国に提言をする必要があるなどということを実感したところです。この間に培いました我々

中核市の知恵、経験、教訓、そういったものをコロナの感染収束のためだけではなく、様々な分野で国に提言し、生かしていきたいと思っております。

今回の中核市サミットにおきましても、各分野でご活躍されております講師、コーディネーター、コメンテーターの先生方に多数ご出席を賜っております。中核市市長会のために重要な示唆をいただければ幸いです。

いずれにしましても、この「中核市サミット2022 in 豊田」にご出席の皆様方とともに楽しみながら、そして有意義なサミットにしていきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。私の冒頭の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



豊田市長

太田 稔彦

こんにちは。豊田市長の太田稔彦でございます。ようこそ、ここ豊田市へお越しいただきました。中核市市長会会長の濱田高槻市長様をはじめ、市議会議員、関係者の皆様、ご参加ありがとうございます。そして、総務省自治行政局市町村課長の田中様をはじめ、中核市市長会相談役の香山様、中核市とともに地方分権を推進する国会議員の会の八木様、中核市市議会会長で横須賀市議会議長の大野様、愛知県副知事の古本様、そして豊田市議会議長の板垣様、大変ご多用の中、ご臨席賜りまして誠にありがとうございます。

また、基調講演の大澤先生、パネルディスカッションのコーディネーター、コメンテーターの皆様におかれましても、大変ご多用の中ご参加いただきまして、感謝申し上げます。

今回のサミットには、約500名の皆様に参加されております。新型コロナウイルス感染対応のため、やむを得ず、この会場と第2会場に分かれて開催させていただきますことを、ぜひご理解を賜りたいと思います。

ここ豊田市は、面積が918Km²、琵琶湖の約1.4倍の面積があり、そのうち7割が森林です。先日の「日経プラス」では、全国の紅葉のトンネルが美しい場所の1位に豊田市の香嵐渓が選ばれました。まだ少し時期が早いので、11月に入りましたら、もう一度豊田市へお越しください。

加えて、春と秋冬に2度咲く四季桜がございます。豊田市には、ひとつの山全体が四季桜で覆われ、そこに紅葉が入りこんだ非常にきれいな四季桜の里がございます。これは恐らく全国では比較するところがない唯一のところだと思います。そんな自然豊かなまちでございます。

一方で、名古屋グランパスのホームタウンでもあり

ますし、11月にはWRC（FIA世界ラリー選手権）が開催されます。来年からのWRCは、豊田市が運営主体になるということで動いています。

WRCのような興行を自治体が運営主体になることは極めて異例だと思いますが、豊田市がWRCの運営主体になる理由は3つあります。

1つ目は、山村振興です。都市部を除く全国の中核市はいずれも、いいところや課題を抱えているかと思えます。ラリーはもっぱら山間地を舞台として展開されますので、観戦に訪れる国内外の人達に日本の山を、原風景を見てもらう。そのことによっていかに私たちが素晴らしい財産を持っているのかということについて、改めてみんなで気付こうという狙いがあります。

2つ目は、交通安全です。ラリーのドライバーは非常にレベルの高い運転技術を持っています。ドライバーを市内の小中学校に招き、ラリーカーを運転してもらい、交通安全の大切さを伝えてもらうという取組をしています。

3つ目は、産業振興です。こういうビジネスモデルがうまくいくのであれば、日本中で展開が可能だろうと思えます。そういう意味で、今回のラリーにはぜひご注目いただきたいですし、それぞれの地におかれましても、ラリーの開催が可能ではないかというお考えがごありでしたら、ぜひ一緒に取組をさせていただければと思います。

結びになりますが、このサミットでの意見交換、学びが、それぞれの自治体にとって意義深いこととなりますことを心からご祈念申し上げまして、開催市の市長としてのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

総務省大臣官房審議官

三橋 一彦 氏

代読：総務省自治行政局 市町村課長 田中 昇治 氏

総務省自治行政局市町村課長の田中昇治と申します。本来であれば、大臣官房審議官の三橋が出席させていただき、ご挨拶を申し上げるところですが、別の公務により出席が叶わなかったため、私の方から代読させていただきます。

本日は、豊田市におきまして全国の中核市市長の方々をはじめ、多くの関係者のご参加のもと、このように盛大に「中核市サミット2022 in 豊田」が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。中核市市長会会長の濱田剛史高槻市長様、今回のサミットの開催都市である豊田市の太田稔彦市長様をはじめ、各中核市の市長の皆様方におかれましては、日頃からリーダーシップを発揮され、地方自治の発展のためにご尽力いただいております。また、新型コロナ対策に日々大変なご対応を賜っておりますことに心より御礼申し上げます。

今後、人口構造の変化や少子高齢化が本格化する中、地方自治体が持続可能な形で住民サービスを提供し続けることは重要な課題です。その上で、社会全体におけるデジタル・トランスフォーメーションの進展や新型コロナウイルス感染症対応で直面した課題などについても、国と地方自治体、また地方自治体間でも協力しながら対応していく必要があります。こうしたことから、総務省では、人口減少社会においても活力ある社会経済を維持するための拠点を形成する「連携中枢都市圏構想」を推進しており、圏域の中心的な存在である中核市におかれましては、引き続き、連携・協力の牽引役を担っていただきますよう強く期待しております。

また、新型コロナ対策については、オミクロン株対応ワクチン接種の円滑な実施に向け、引き続き、接種体制の整備を進めていただきますようお願い申し上げます。

また、新型コロナへの対応を通じ、改めて社会全体のデジタル化が強く求められています。デジタル社会の基盤となるのはマイナンバーカードです。現在申請件数は7,000万件を超え、人口に対する割合は10月25日現在で57.2%であり、交付枚数は約6,400万件で、人口に対する割合は50.7%と50%を超えています。総務省では、更なる申請促進を図るため、カードをまだお持ちでない方へQRコード付き交付申請書の送付や、全国の携帯電話ショップなどでの申請サポート事業に取り組んでいます。

更なる申請件数の増加を図るため、マイナポイント第2弾のカード申請期限を令和4年12月末まで延長するとともに、企業等への出張申請受付の推進やカードを利用した地域独自のポイント給付を支援する自治体マイナポイント事業を10月31日から展開するなど、引き続き政府目標を踏まえ、関係省庁や地方自治体と緊密に連携しながら、一層の普及に取り組んでまいります。

カードのより一層の普及のためには、トップである皆様方ご自身のリーダーシップが大変重要であると考えております。国の事業とも連携しながら、地域における申請機会の拡大が図られますよう、希望する企業や学校等を訪問しての出張申請受付をはじめ、積極的な取組をお願いいたします。

総務省では、活力ある地域社会の発展のため、今後とも皆様と一体となって様々な取組を進めてまいりますので、引き続きご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

結びに、本日ご出席の皆様方の今後ますますのご活躍とご発展を祈念して、私の挨拶といたします。

令和4年10月27日

総務省大臣官房審議官 三橋 一彦

中核市市長会相談役・一般財団法人地方債協会会長

香山 充弘 氏

中核市サミット、ここ豊田市にてめでたく開催の運びになりましたこと、心からお慶び申し上げます。

新型コロナウイルス感染症でデリケートな時期に開催の準備にあたられました関係の皆様方にも、心からご苦勞様と申し上げたいと思います。

今年はコロナ、ウクライナ、安倍元総理の狙撃事件、あるいは酷暑、台風、北朝鮮のミサイル発射と、とにかくよろしくないことが続くハードな年となっております。

私は、この一連の事件を通じて、人々というのは命に対して特別に敏感だなと再認識できたように思います。こと命にかかわるということになりますと、行政は四の五の言っていないで、あらゆる手立てをとにかく即座に講じてほしい。これが国民の率直な気持ちであろうと実感をいたします。

現在、地方行政はDX化ということが課題とされております。しかしなかなか進みません。ITやビッグデータを活用して行政の効率化を図り、そして更に新しいサービスを創造していく、そういうスローガンがいま一つ実感が湧かないというところに原因があるのではないだろうかと思えます。

そうであれば、今年経験したようなコロナ対策や災害対策を想起することとすれば、少し違ってくるのではと思っております。安否の確認、災害の類型に応じ

ての前例、他の地方公共団体の対応、あるいは諸外国の対応、更には今後の被害想定、多方面にわたる関係者とのスピード感を持った調整、これらすべてDXの活躍場所のオンパレードだと思います。

地方行政をリードする位置にあられます中核市の市長さん方ですから、この命に係わるような事態に対する気持ちと同じような気持ちをもって、地方行政のDX化を積極的にけん引していただきたいと思えます。

DX化等により、各地方団体の活性化が図られ地域の魅力が加速される、それによって中核市が一段と発展を遂げられますことを心から祈念をいたしまして、ご挨拶いたします。



中核市とともに地方分権を推進する国会議員の会 衆議院議員

八木 哲也 氏

皆さまこんにちは。ご紹介を賜りました八木哲也でございます。私はこの愛知11区豊田市・みよし市から選出されております自由民主党所属の衆議院議員でございます。会長の衛藤征士郎先生より代理を仰せつかり、ご挨拶させていただきます。衛藤先生の祝文は、入口に掲示してございますのでご覧いただければ幸いです。

さて、今から21年前の2001年に、ここ豊田市で中核市サミットが開催されました。当時私は一期目の豊田市議会議員で、全国から中核市の市長の皆さまがご参集になられたことは本当に驚くべき出来事で、豊田市も中核市に移行したのだと自負する気持ちがございました。

あれから20年が経ち、時代の変化とともに諸々の課題が出てまいりました。みんなが集まればいい知恵ができる、「三人寄れば文殊の知恵」と言うように中核市の皆さま方が集まれば、問題の解決に一歩でも二歩でも近づけるのではないかと、そんな思いがいたします。

先ほど濱田会長が、この3年間、コロナの諸々の課題に直面されたとおっしゃいました。これは中核市ならではの課題かもしれません。

しかしながら、皆さまの知恵を結集すれば、必ずその先の未来が見えてくるのではないのでしょうか。権限と責任とそれに伴う予算をしっかりと確保することと

が、私は権限と責任の裏打ちだと思います。中核市それぞれの問題はあります。しかし、国政にその声をしっかり届けることで、国が大きな枠組みを作っていくことが大事なことだと思います。

皆さま方のご意見等を承り、中核市だけでなく、それを取り巻く市町村においてもその成果が出るように、国政に携わる身として頑張っていくことをお約束申し上げましてご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。ありがとうございます。



愛知県副知事

古本 伸一郎 氏

皆さんこんにちは、愛知県副知事の古本でございます。「中核市サミット2022 in 豊田」が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

また、中核市市長会長の濱田会長をはじめ、全国から当県にお越しいただきました皆様、心より歓迎を申し上げます。

豊田市で泊まるという皆様、とてもいいまちですので、ゆっくりお過ごしいただきたいと思います。さらに、お帰りの際やまた当県にお越しの際は、ぜひセントレアや県営名古屋空港もご利用いただきたいと思います。

当県は、自動車産業を中心にもものづくりの県と言われております。皆様方の自治体も同様であります。世界からお客様が来ていただければ元気が出てくるということでもあります。

他方、9月26日から大きく方針が転換され、中核市におかれては保健所の皆様に大変な混乱とご苦勞をおかけしております。これを境に全数の届出がなくなりましたが、必ずフォローしなければいけない高齢者等が約2割と聞いております。残りの約8割の皆様をどう把握し、万が一重篤化した時のフォロー体制に腐心をいただいていることに重ねて感謝と敬意をします。同時に、県設置の保健所との連携で大変なご苦勞もあるかと存じます。改めて感謝申し上げます。

先ほどマスクを外していいということで、躊躇して外しました。マスクを外すと感染拡大するのではないかと思います。先週、先々週とアムステルダムとダブリンへ参りましたが、誰もマスクをしていませんでした。トランジットで立ち寄ったフランクフルトは、バスや電車の中だけ着けるというレギュレーションでした。日本と他国を一緒にはできませんが、もうマスクは不要ではないかと思う市長、議会の皆さん、中核市市長会の皆様から発信していくということもあると思います。濱田会長もおっしゃっていました分権と権限移譲をぜひ期待したいと思います。

最後に財源の問題ですが、道路特定財源と言わ

れる自動車関係諸税は、地方の財源の中核を成しています。そして、電気自動車にどのように扱うかということは、政府の方でも議論があるようです。昭和28～29年に、財源特例法でいわゆる揮発油税、関係諸税を道路特定財源化し、昭和の高度成長を支えたことは紛れもない事実です。だとすれば、この令和の時代にも来たるカーボンニュートラルにどう備えるかということを考えれば、皆様と共に、また皆様から、この地方都市の必需品である自動車に対する課税のありようと、かけがえのない地方の自主財源であるかつての道路特定財源、自動車関係諸税をどうしていくかという議論をいただくことも、分権や地方自治の何たるかだと思います。

総務省からもいらっやっていますので、マイナンバーカードについて、ただでさえ財源がない時に2万円分のポイントがもらえるからカードを作ってくださいというのはどうなんでしょうか。お年寄りの多くはスマホを持っていません。本気でマイナンバーを国民1枚必ずというのであれば、免許証や保険証とのオールインワンなど、プラットフォームの改革の必要性をぜひ中核市市長会の中からご提案いただければ、大村愛知県知事も大いに発言してくれると思います。一緒になってみんなに普及するように努力したいということをお伝えして、ご挨拶にしたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。





演題

未来の未来を探る

～AI・組織・コミュニケーションの視点から～



<講師>

日本大学 文理学部 情報科学科 助教

次世代社会研究センター センター長

大澤 正彦 氏

1993年生まれ。博士(工学)。東京工業大学附属科学技術高校、慶応義塾大学理工学部をいずれも首席で卒業。学部時代に設立した「全脳アーキテクチャ若手の会」が2,500人規模に成長し、日本最大級の人工知能コミュニティに発展。IEEE Young Researcher Award(2015年・最年少記録)をはじめ受賞歴多数。テレビ、新聞、ラジオほかメディア多数掲載。孫正義氏より選ばれた異能を持つ若手として孫正義育英財団一期生に選抜。日本認知科学学会にて認知科学の若手の会を設立。2020年から現職。著書に『ドラえもんを本気でつくる(PHP新書)』。夢はドラえもんをつくること。

本日は、「未来の未来を探る」というテーマでお話させていただきます。

「ドラえもんをつくる」、これが私の夢です。これが私の全てです。そう言っても全く過言でないくらい、これを目指してずっと生きてきました。物心ついた時にはもうドラえもんが作りたくて、私の感覚としては生まれつきドラえもんをつくりたいというくらいに感じています。例えば、ご飯を食べたいとか、眠りたいといった感覚と同じようにドラえもんをつくりたいという感覚が、気づいたら自分の中にありました。そしてこの夢に3文字足して、私の人生のビジョンとしています。

『ともに』ドラえもんをつくる。なぜ、この3文字を加えたのかといえば、それはドラえもんという、世界中から愛されるキャラクターをつくる上で、一人でやってもしかたがない、自分よがりややってもしかたがないと思っているからです。自分だけで自分の思うドラえもんをつくるのではなく、みんなに認められ愛されるドラえもんをみんなでつくる。一人も取り残さず、70億人80億人の規模で一つのチームを作ってドラえもんが出来上がる、これを自分のビジョンとしてずっと心に持ってきました。

研究者としての私は人工知能研究者で、その中でも特に汎用人工知能というテーマに取り組んでいます。汎用人工知能というと、今日のところはいわゆる人間みたいな知能と思っていただいても結構ですが、この汎用人工知能はテーマが広範に渡ります。自分のちょっとした自慢ですが、汎用人工知能というテーマで博士論文を書いた人がいるか検索すると、日本には私一人しかいないようです。つまり私は汎用人工知能というテーマで学位を取った唯一の研究者であると思われます。

「ヒューマンエージェントインタラクション」という研究領域を簡単に説明します。ヒューマンは人という意味です。そしてエージェントとは人工知能やロボットといった擬人化されうるような、心があるように思われる存在のことです。そしてそれらがインタラクション - つまり相互作用しながら関わり合うことを研究する分野です。私はドラえもんとのび太の関係性にすごく興味があって、人との社会の全体を設計しながら、知的システムを作っていく研究を進め、インタラクションを中心に体系化することで汎用人工知能実現にアプローチできるという考えを博士論文にまとめました。

ヒューマンエージェントインタラクションという研究領域は世界中で研究されていて、年に1度の国際会議には世界中の研究者が集まって研究発表をします。ここでは、全ての論文が発表できるわけではなく、優秀と認められた限られた論文だけが発表できます。そんな中、採択された論文の過半数が日本のものという状況があります。これはかなり注目いただ

01 自己紹介

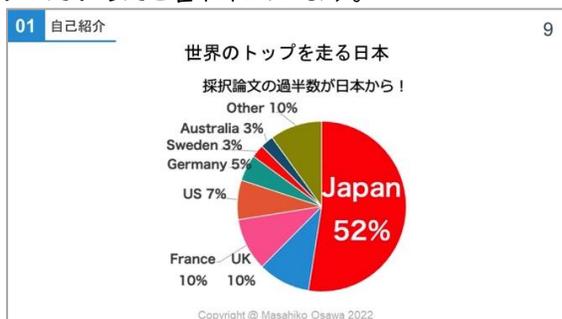
ビジョン

3

ともにドラえもんをつくる

Copyright © Masahiko Osawa 2022

ける事実なのではないでしょうか。それは人と人工物が共存する未来を、日本の文化が受け入れやすかったからだと言われています。

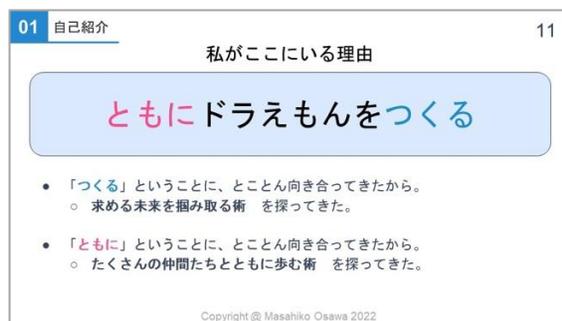


例えば、八百万の神とか付喪神とか、我々はモノに心を感じる文化を持っています。それにアニメーションでは、人とロボットが共存するような世界観がたくさん描かれてきました。文化として根付いているこのヒューマンエージェントインタラクションの感覚が、日本はかなり先を行っている状況と言えます。

私はまだ20代ですが、こういった若者がなかなか立たせていただける場ではないのだろうと思っています。それでもなぜここに立っているのか、私が何を皆さんにお届けできるかと思っているかという、ともにドラえもんをつくるという自分自身のビジョンです。

私は、命をかけて「ドラえもんをつくる」ということに徹底的にこだわってやってきました。ドラえもんを絶対につくりたい、どうしてもつかみ取りたい未来をどうやってつかみ取るか。それを徹底的に試行錯誤してきました。だから今回の未来、そして未来のその先ということを考える上で私の見てきた世界を共有したい、それが一つです。

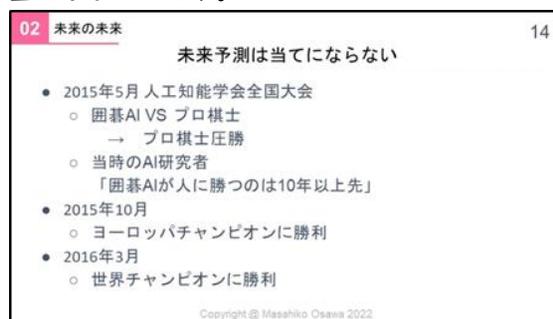
もう一つ、『ともに』ということに命をかけてきました。多くの人と一人も取り残さず、みんなと協力していけるような組織のあり方、コミュニティのあり方はないだろうかということを一生涯ずっと考えてきました。



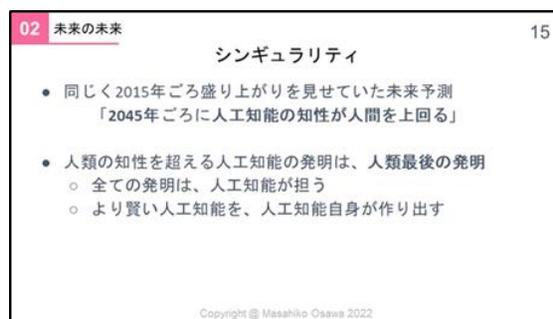
未来のことを語る上で、過去を振り返ることは非常に重要であると考えます。

2015年という年を振り返ってみると、この年に日本の人工知能研究者の中で印象的なことが起こりました。函館で開催された人工知能学会の全国大会で、囲碁AI vs プロ棋士の公開対局が行われ、結果はプロ棋士の圧勝でした。この様子を見て、日本中から集まった当時の人工知能研究者たちは口を揃えて「囲碁AIが人間に勝つのは10年は先でしょう」と結論づけたのですが、5か月後の2015年10月、囲碁AIはヨーロッパチャンピオンを倒し、さらに翌年3月に世界チャンピオンを倒しました。

未来予測は、研究者や専門家が集まって予測しても当たらないのです。



未来予測という言葉もAIとともに考える時に外せない、「シンギュラリティ」という言葉があります。2045年頃に、人工知能の知性が人間を上回るのではかというものです。この人工知能の発明は、ただの発明ではなく、人類最後の発明とも言われていました。

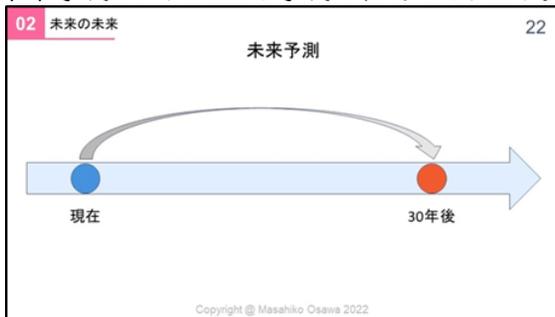


人間よりも賢い人工知能ができるということは、人間よりも優れた発明ができるはずであり、人間よりも優れた発明ができる人工知能ができた時点で、人間が発明する時代が終わって、人工知能が発明をしていくのではないか。その発明には、より賢い人工知能の発明が含まれる。つまり、人工知能が自分自身をより賢くすることを繰り返して、人間が追いつ

けないような発明が進展していくのではないかと
いう予測がされていました。

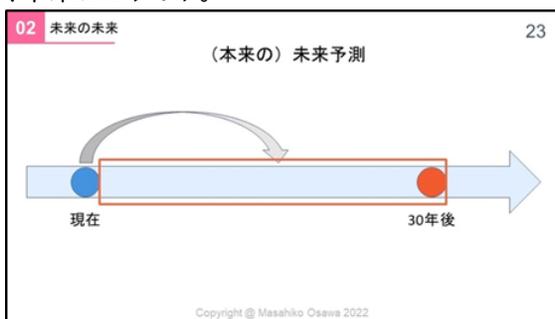
しかし、この予測を考える上で、さらに過去を振り返ると、面白い事実が見えてきます。1993年に公開された映画「ドラえもん のび太の『ブリキの迷宮』」は、技術が進んで、様々な働くロボットが発明され、人間が楽をするようになったチャモチャ星を舞台にした物語です。人間は次第に発明するのも面倒になり、発明家ロボットのナポギストラ博士をつくります。発明することや働く必要もなくなり、羨ましいと思っていたところ、そのロボットが反逆を始め、「人間ノ時代ハオワッタ。ろぼっとノ世紀ガハジマルノダ!」と言って支配し始めるという話です。このストーリーを見ると、今の未来予測と30年前の未来予測は、それほど変わらないのではないかと思います。テクノロジーや環境は変わっているのに、我々の想像力はアップデートされていないのではないかと
いう不安な気持ちになるわけです。

未来予測というこんな予測の仕方をされます。



「30年後何が起こるのか」と、現在という点から、いきなり30年後に飛ぶような予測をするから当たらないのではないかと思いますのです。

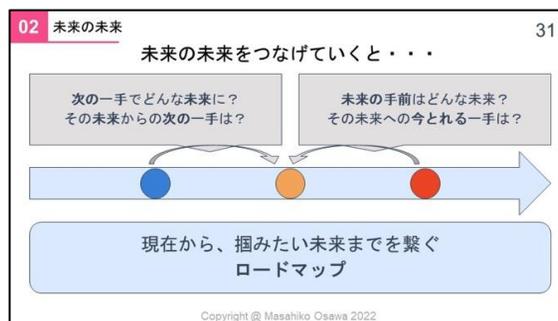
未来というのはこの瞬間より後は全て未来ですから、本来はこうです。



この瞬間より後から連続的に変化する未来を一個一個追って、そのわずかな変化を繰り返し積み上げ、30年分積み上げてたどり着くのが30年後の未来のはずです。

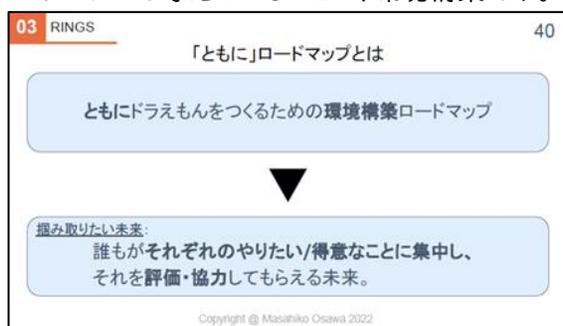
この方法で未来予測をしているものが人口予測です。人口は、どうい変化が起きるかがある程度分かっているため、連続的にどう変わっていくのかというモデルを立てて予測ができます。ただ、この方法で予測できるものは量的に扱えるものに限られます。量の増減をモデル化することができれば予測できるかもしれませんが、質的な変化を予測するのはハードルが高いことです。ドラえもんがいつできるのかということはこの方法は答えることができないし、直感で答えることもできません。だから私は、どうしてもたどり着きたい未来への道を明らかにするために、未来の未来を予測するわけです。

例えば、30年後の未来を予測する場合、15年後の未来を予測して、その未来の解像度をなるべく高くイメージします。そのイメージを紐解いて、次にどのような変化が起こるのかを予測して、ステップを踏んでいく必要があります。例えるならば、詰め将棋のような感覚です。一手詰めで終わるような未来の進み方というのは、なかなかありません。三手詰め、五手詰め、七手詰め、1個1個変化をして、変化した時の状況をイメージして、そして次を見ていく必要があるわけです。そうすれば、次の一手でどのような未来になるか、その未来から次の一手は何かと見えてくるものもあれば、未来の手前ではどのような未来が来るか、その未来に進むためにはどうすればいいかと、現在から未来を行ったり来たりしながら、一本の進むべき道を探っていく。これが未来予測をつなげてできるロードマップではないかと思います。確かにこの変化なら起こりそうだとみんなが納得できるような変化を積み重ねて、納得できる変化だけで埋めた現在から未来への懸け橋がロードマップになると
思うわけです。



私はロードマップづくりを一生懸命やってきました。そして2つのロードマップを作っています。「つくる」ということに結び付いたロードマップと、「ともに」ということに結び付いたロードマップです。

「ともに」ということに結び付いたロードマップは、誰一人取り残さない、80億人の仲間とともに歩む。それを実現するためのロードマップです。「ともに」ロードマップで考えていることは、環境構築です。



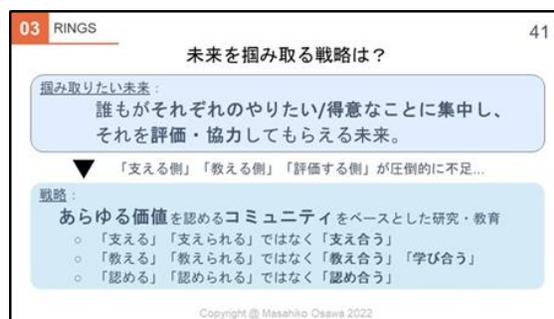
ドラえもんをつくるためにどんな環境を作ればいいのか、その環境をどうやって手に入れるかということでした。だから私がこのロードマップでつかみ取りたい未来は、ドラえもんをつくることに集中できる未来です。

ですが、これはゴールとしては△だと思っています。私がドラえもんをつくるから協力してほしいということをお願いだけではなく、私がドラえもんをつくるという思いと向き合うことができるように、世界中のみんなが自分がやりたいことと向き合える世の中で、一人一人がやりたいことをやっている中で協力し合って出来上がるドラえもんに魅力があると思います。

そのため、私のつかみ取りたい未来は「誰かがそれぞれやりたいこと、得意なことに集中して、それを評価、協力してもらえ未来」です。

これだけいうと、わがままな放題させると言っているようで不可解かもしれません。ですが、よく考えると自分のやりたいことをやるのが、不可解に思える今の方がよっぽど不可解です。ただ今は、やりたいことをやる人を支え、教え、評価する人が圧倒的に不足していて、みんながやりたいことをやると収拾がつけられない。だからこれは「やりたいことをやる」といった安直な一手詰めでは解決できない問題といえます。そこで私は何手積み重ねればこの「みんながやりたいことをやれる未来」をつかみ取れるのかを考えているわけです。

私が提案している1手目は、あらゆる価値を認めるコミュニティをベースとした研究教育を作り出すことです。言い換えれば、支える・支えられるではなく「支え合う」、教える・教えられるではなく「教え合う」、「学び合う」、認める・認められるではなく「認め合う」。そういうエネルギーによって、場を、未来をつつていくチャレンジです。



そう考えると、ともにドラえもんをつくる環境構築ロードマップは、世界を結束させていくロードマップであり、全員が個性を生かした生産性の高い組織を作るロードマップであり、次世代に求められる能力を育てる教育に関するロードマップであると同時に、誰一人取り残さない共生社会を実現するためのロードマップであると思っているから、この場でお話させていただきたいのです。

私が学生にプレゼンテーションを教える時、一番強調して学生に伝えることは、プレゼンテーションの目的をはっきりさせてからプレゼンテーションを考えることです。目的は単に「知ってもらいたい」とかではありません。聴いてくださった人々に、どのような行動をとってほしいのかを具体的にイメージし、言語化することを求めます。学生に言ってばかりでは笑われてしまうので、私も今日は聴いてくださった皆さんにとってほしい行動を言語化してきました。

私は、この講演を聴いた皆さんに、これから説明するロードマップの続きを皆さんとともに描き、歩む意思決定をしてほしいです。それが実現できたら私の今日のプレゼンテーションは自分としては成功だと思っています。

私のロードマップは2014年から2044年までの30年です。それは2014年に私が、30年という時間をかけて自分たちがつかみ取りたいと思っている未来をつかみ取ろうと宣言したからです。

ロードマップは、よく現在が左端になっていて、

過去に書いたロードマップがなかったことにされてしましますが、私はスタートした2014年を左側に置いています。2014年には、「全脳アーキテクチャ若手の会」を立ち上げました。

この写真は、何気なく撮った普段の運営会議の写真ですが、学校帰りの高校生もいれば、大学生もいるし、不登校でもこの場には来れる中学生とか、若手からシニアまでたくさんいる。外国籍の方や、先月来た人もいれば、2年ぶりに来た人もいるし、専門分野もばらばらです。どのような立場であっても、どちらが上とか下とかではなく、お互いをリスペクトしあって、いいものを作っていくコミュニティが広がることにワクワク感を覚えました。こういう場が成立するのを肌身で知っているのが私の強みだと思うし、こういった場は、この世の中では自然なものだと思います。

学生の時にもう一つ、孫正義育英財団でコミュニティの活動をしました。孫正義さんが全世界にいる200人くらいの若手達を集めたコミュニティですが、みんなすごい能力を持っているけれど、すごく変わった子たちばかりです。そういう変わった子たちとコミュニティが成立するというのもこのコミュニティから学びました。

こうして、どうすればコミュニティってうまくいくんだろう、どういうコミュニティが理想なんだろう、そういう知見を学生時代に積み重ねて、2020年の3月に私は学生生活を終えました。学位を取って2020年の4月に日本大学に着任して、大澤研究室という組織が始まりました。

私は日本大学にこだわりを持っていたため、日本大学の今の職以外1個も教員の職を受けていません。自分が歩む道として、ここがベストだと感じたからです。

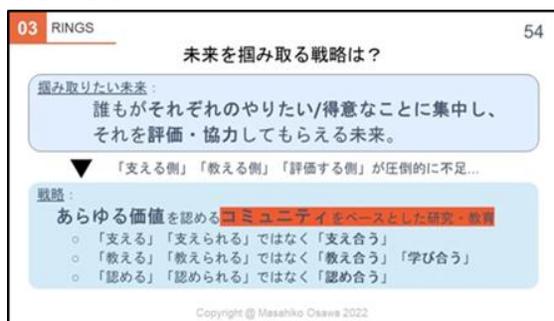
色々な理由がありますが、国内最大規模であること、知名度もある程度高いこと、文理学部という学部があり、これもチャンスだと思いました。

一つ大きな理由は、偏差値50の大学と言われていたからでした。文理学部はまさに偏差値50くらいの学部ですが、偏差値とは変な数字で、入試に特化した限られた価値軸で測った時のたまたま真ん中くらいにいた人たちのことを偏差値50と言っています。価値軸は無限にあるのに、よく知られたなじみのある価値軸で人を測るのは何か気持ち悪いと思ったのです。

偏差値50と言っても、人間としてのレベルが普通というわけでは決してなく、別の価値軸では偏差値100であったりするわけです。その人を偏差値50の軸で測ったり、ましてや偏差値30になってしまう軸で測るのではなく、その人が偏差値100として評価される軸で一人一人見るゲームチェンジが行われたらすごく面白い。そういう世界を目指す時に、偏差値50というものを見てみると、間口の広さや多様性の根源といったものを表しているのではないかと思ったのです。このゲームチェンジが大学という場で行われたら何かが変わる気がする。日本大学の発展が、社会の次のステップに直結するのではないかと思います。

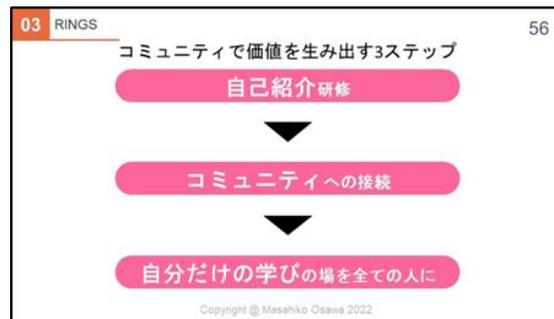
世の中のプロジェクトのメンバーは、当然のようですがプロジェクトを実施するために集められると思います。ところが、集められたのはいいものの、お互いの考えていることが分からない、草の根的な活動が足りない、などの理由で失敗してしまう例をたくさん見てきました。そこで私たちは、集まることが目的の組織をつくりました。何をやるかは一切決めないのです。

コミュニティというものを作って、その中でお互いの心が知れた時に、この人とこれをやりたいという気持ちが生まれて、そこから自然に生まれてくるプロジェクトを育てていくのがコミュニティベースという考え方です。



ではコミュニティから価値がどんどん生まれて行くためには、何が必要でしょうか。私たちは2014年ごろからずっと試行錯誤してきた結果、3つのステップで進めて行くことが重要だとわかってきました。

ファーストステップは、自己紹介を練習することです。今日お集まりの皆さんはあるかもしれませんが、自己紹介を練習したことがない方がすごく多いです。営業マンが自分の商品を理解せず、説明の練習をせずに営業に出掛けることはない。自分という一生付き合っていく存在をうまく説明できない状態で人前に出て行くのはもったいないです。さらに自己紹介を練習すると、自分がなぜここにいるのか、何のためにここにいるのか、何をしたいのかをしっかりと言語化できるようになります。すると自分の意思決定が明確になり、速くなり、情報の感度がよくなります。この人とつながりたい、こんな情報が欲しいなど、今まで気付かなかった情報に気付くようになります。そういう感度を高めて、自分を表現できるように徹底的に支援した上で、彼ら/彼女らをコミュニティに接続します。



大澤研究室は人工知能の研究室ですが、最初の1か月は自己紹介の練習しかさせてもらえません。自己紹介ができる子たちは強みが全然違います。その上で、コミュニティに接続して色々な人に出会う。そうするとコミュニティという場が、ある種のシラバスのように見えてきます。シラバスから自分の学びたい授業を選んでいったように、この人から学びたい、この人と話してみたい、この人とつながってこういうことをやりたいという、コミュニティが自分専用の学びを提供してくれるプラットフォームに変わるわけです。

この原理を、任意団体の時から大学に入ってきても一貫してやってきました。そして、ウニ型組織という組織論を作ってまとめています。海にいるウニのような組織を作れたらいいとずっと思っていました。みんながバラバラの方向を向いていい、むしろバラバラの方向を向いているのが美しさの根源で、根っこではしっかりつながっている。誰かの方向に向かうときはみんなでそっちに協力して向かって、別の誰かの方向に向かうときにはまた協力する。誰がリーダーとか、誰がフォロワーとかではなくて、お互いに支え合うような組織で、中にはしっかりおいしいものが詰まっている。それを理論にして、色々なところで展開できるようにしていけば、一人一人が尊重されるような組織、コミュニティができるのではないかと考えたわけです。



そんな私たちのコミュニティ運営での合言葉は、「100人で100人の夢を叶える」。耳ざわりのいい言葉を言っているだけのように聞こえますが、貪欲な合言葉です。一人の夢を100人で支えるために100人で組織として応援して、それが夢100人分、100個ある。だから、100人のチームが100個の夢をそれぞれ推進するから100×100で1万人分のエネルギーが出てくる。そんな組織論ができないだろうかと考えています。

今の組織論では、一つの目的を達成するために人が集められて管理をするという考え方なので、せいぜい100人いたら50人分の力が出たらいいほうかと思いますが、それを1万人分にします。

もちろんこれは机上の空論に過ぎませんが、これに近づけていけば、人が増えれば増えるほど価値が広がっていく。この変換が行われたときに人のつながり、コミュニティの在り方、価値創出の在り方に変化が起こる。いわゆる特異点（シンギュラリティ）ではないかと思っています。

03 RINGS 58

私たちの合言葉

100人で100人の夢を叶える

- ・ もしも100人で100人の夢を叶えられたら
 (100人のチーム) × (100個) = 1万人規模の価値創造
 ができるのでは？

Copyright © Masahiko Osawa 2022

私たちの実績として、大澤研究室が出来て半年で全員がそれぞれの道で開花しました。学会やビジネスコンテストで受賞した人もいれば、学部3年生で給料をもらいながら、企業と研究できる人まで出てきました。日本科学未来館でワークショップを主催した人とか、メディア運営した人、ロボットをつくった人、動画クリエイターになった人もいました。2年後、彼らが就職のタイミングを迎えた時、9人中6人は大学院に進学しました。これによって、残りの3人のうち、就職したのは1人、残り2人は在学中に手に職がついて独立しました。

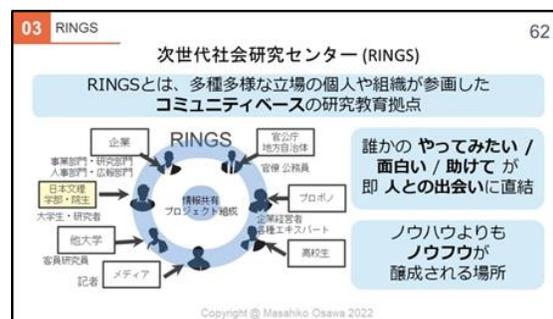
我ながら面白い現場だと思っていたら、私の個人的な裁量でやっていた活動を学部からも面白いと思っていただけて、2020年4月に始めた研究室の成果を早急に認めていただき、2020年12月に大学の仕組みとして取り入れていただきました。これが

今の最前線、私の所属組織である次世代社会研究センターです。

次世代社会研究センターは、2020年12月末の記者会見でパートナーシップを結んで産官学連携、文理融合でコミュニティとしての価値創出をやっていくという宣言をしました。多種多様な立場の個人や組織が参画したコミュニティベースの研究教育拠点。これがRINGSという組織です。ここには大学の学生はもちろん、教職員、企業、官公庁や地方自治体の人、他大学、メディア、高校生も入ってきます。



そして特徴的なのは、プロボノという仕組みを大学に作ったことです。プロボノとは専門性を生かしたボランティアという意味で使われる言葉ですが、大学の関係者でなくても大学の中のコミュニティに入ってきて一緒に活動ができ、誰かの「やってみたい、面白い、助けて」そういった声が入ると、人との出会いにつながる、ノウハウよりもノウフウを醸成する場所です。



ノウハウは「How」、やり方を知ることです。ノウフウとは「Who」、誰に聞けば分かるのかという考えが醸成される。自分ではどうしたらいいかわからないけれど、こういうことをやってみたいとか、こういう問題を抱えてるんだとつぶやくと、その話ならこの人に話してみたらどうかという声が入ってくる。誰に聞けばいいかがすぐ分かる、そういう場をコミュニティとして大学の中に作って、その中だけでなく外に開く、それが私たちがやってるRINGSです。設立と同時に、これだけの全く違う領域の企業や団体が、パートナーシップを結んでくださいました。



RINGSには、体育専攻の学生もいれば、コンピューター専攻やドイツ文学の学生もいて、自分の興味に従って活動します。プロボノとしても、非常に多岐に渡る専門を持った方々が入っていただきました。

プロジェクトをいくつかご紹介します。例えば、RINGSにいる視覚障がいのある学生は「僕の視覚障がいは強みだ。」と胸を張って言っています。彼は常に白杖を持って移動しますが、この際耳で音声ガイダンスの道案内を聞くのがすごく嫌だったそうです。目が見えないから耳からしか情報を集めることができない、耳を塞がれて散歩を楽しむことができないことが嫌だ。だから彼は、色々な専門性がある学生と協力して、白杖から伝わる振動だけでナビゲーションができるデバイスを作りました。彼の成果は「SDGs ACTION! AWARDS」で準グランプリを受賞したり、りそな銀行主催の「SDGsアイデアコンテスト」で優秀賞をいただいたりしました。



他にも「朝顔プロジェクト」という相対的貧困の子どもたちに朝ご飯を届けたいという食育の活動をしており、これも「SDGs ACTION! AWARDS」で地方自治体賞をいただきました。ファイナリスト12組のうちの2組がRINGSのメンバーということが起こりました。



また、今年、日本科学未来館で日本史上最大のロボット展が開催され、私たちも参加することができました。

次に、豊田市と連携したものに絞ってご紹介します。

カーボンニュートラルに興味を持った学生が勉強したいと言ったら、電気事業連合会という専門家集団や経産省でカーボンニュートラルの提言をした若手の協力、さらにゼロカーボンシティである豊田市の協力で、多角的にカーボンニュートラルを学べるゼミが出来上がりました。その結果、学生たちが色々なカーボンニュートラルに関する知見を学べるゲームを作ることでアウトプットされました。



そのほかには、山村地域の中高生が自分たちの故郷にもっと魅力を感じられるようにしたいという豊田市からいただいた課題に、大学生がどんどんアイデアを出してきて、大学生と中高生が一緒になってワークショップを開いて、自分たちの山村地域の魅力を考えるということを行ったところ、そこでのアイデアが条例の条文になるという成果につながりました。



「地域リハ イノベーションセンター」がリニューアルされた時には、未来のリハビリテーションのあり方を大学生、医師、職員みんなで考え、コンセプトムービーを作りました。

また、高校生と大学生と豊田市職員が半年間に渡って、LGBTQ+や障がい者福祉、マイノリティと言われる人たちについてのゼミを行い、発表会をしました。ここに参加していた高校生が日大文理学部に入学して、今ではRINGS生として活躍しています。

本日の中核市サミットも、このような様々な協力関係の中でお話をいただいたのかと思います。

さらに今日10月27、28日には、もう一つのイベント「NU EXPO 2022」が動いています。会場前の芝生広場に学生たちが来て、日本大学の展示会、展覧会、オープンキャンパスをやっています。地域の距離なんて関係ないということを自分たちで体現して見せたい学生が自分たちで企画し、資金を集めて開催しています。



RINGSが始まってまだ2年も経っていませんが、何十ものプロジェクトが成功しています。

なぜできるのか、大変ではないのかと言われますが、私はあまり手を出してないから大変ではないです。今、外でやっている展示会も私は1回も手を出してないです。主体的に動ける学生を育てて、人とのつながりの中で新しい掛け算を作って、新しいアイデアを作っていく。それを応援してあげるだけで、こんなに色々なものや価値が生まれるということを成果として見ることができました。

私がやっているのは3つです。1つ目は、1対1で、自分がやりたいことを見つけ言語化するという、コミュニティの入口に立つまでのお手伝いをしています。2つ目はコミュニティの触媒になることです。私の大好きな人ばかりがこのコミュニティにいますので、この人と繋がったらいいいのではないかとというノウハウだったら誰よりも持っている自信があります。3つ目

は、必要に応じたタスクマネジメントやプロジェクトマネジメントです。この活動は学内外からも注目していただいて、去年までの広告換算額は32億円になりました。

私の目的は、ロードマップの続きをここにいらっしゃる皆さんと描き歩むことです。豊田市とこれだけ成功してきました。自信を持って成功と言えると思っています。豊田市とできたのだから、色々な市とできたらもっと面白いことが起こるんじゃないか。それは1+1ではなく、RINGSが触媒になって、色々な市が色々な連携をしていくお手伝いできたら誇らしいと思いますし、そういうことをやってみたいです。

ここまではすでに「できている」話でしたが、次に未来予測、未来をどうやって考えていくかという話に移します。

RINGSは、学問の壁はもう取り払われているので、全学組織になるのではないかと思います。学部だけで閉じこもってやる必要はなく、文理学部でできたら、全学部でやる。この未来をまず一手目として打ちたい。

その次はカリキュラム化です。すでに今年から、RINGSで教育している内容を学部にも認めていただいて、授業として開講されるようになりました。そのため、RINGSに入っていないでも学部の学生なら誰でも履修して自己分析、タスク管理、目標管理、リーダーシップ、フォロワーシップなど色々なことを学ぶことができます。これは次世代の社会で求められる人材や能力とすごく相性がいいのです。

例えば、経産省の未来人材ビジョンという資料と照らし合わせていくと、期待されているような教育がかなりできるのではないかと思います。でも、そういう行政資料には、探究学習とか問題解決発見能力の育成について、「サードプレイスに期待する」とよく書いてあります。

つまり、学校教育が変わるのは大変だから、塾や子ども向けの講座でこういう力を伸ばしてほしいと書いてあるのですが、大学のカリキュラムとしてやれるならやりたいです。やれると思いますし、できてきている気がします。

RINGSのコミュニティから学べること

- 自己分析
- タスク管理
- 目標管理
- プロジェクトマネジメント
- 他者と繋がる力
- チームメイキング
- キャリア
- メンタリング
- リーダーシップ
- フォロワーシップ
- テクノロジー活用
- PR・ブランディング

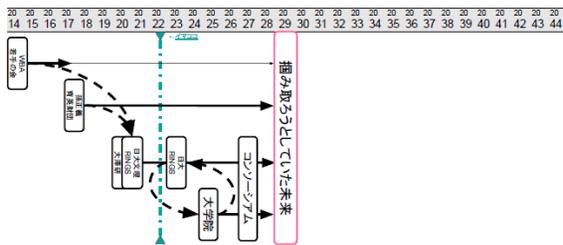
次世代社会で求められる人材・能力^(*)を育てる教育のブレックスルー

^(*) 経済産業省 未来人材ビジョン <https://www.meti.go.jp/press/2022/05/20220531001/20220531001-1.pdf>

Copyright © Masahiko Osawa 2022

もし本当にできてきていると認めていただけるなら、大学院にできないかということを考えています。大学院の2年間で、世の中で必要とされている能力を学ぶことができれば、面白いんじゃないかと。そこでは、RINGSで活動していたように、自分でやりたいことをしっかりと言語化しチームを作って、仲間を見つけて実際に課題に取り組んでいく。プロジェクトもマネジメントしていく。やりたいことをやるということを2年間みっちり実践できる大学院を作りたい。こんな大学院があったら、市の職員さんを送り出してくれませんか。つまり、行政の課題を理解している職員さん達が、市から離れて大学院に入学する。そこで行政の課題を言語化し分解して、世の中の解決策に出会って、人に出会って、組織に出会って、色々な仲間ができて、解決策とネットワークとその能力を全部引き連れて2年後に市役所に帰ってくる。こんなことが本当にできたら、送り出していただける市もあるのではないかと考えています。行政職員以外にも企業や国、色々なところから送り出してもらえることが実現したら、コンソーシアムようになっていきます。それが大きくなって、日本中に広がっていけば、つかみ取ろうとしている未来にたどり着くのではないかと考えています。

「ともに」ロードマップ



Copyright © Masahiko Osawa 2022

誰もがそれぞれのやりたいこと、得意なことに集中し、それを評価、協力してもらえそんな未来をつくりたいと言いました。あらゆる価値を認めるコミュニティをベースとした研究教育拠点、それを実現し、つ

くっていきたい。市と市が協力するとか、企業と企業が協力することは、色々な感情やしがらみがあって難しいこともあります。でも、そういったものを1つずつらして、1つ場所をつくって結びつけてみると意外とうまくいくことがあります。

実際にRINGSをやっていると、「RINGSを通すと連携が早いね」と言われます。しがらみがずっと消えていくのです。それを大きくしていけば、色々なところと連携できる。何をやらなければいけないとか、押し付けられる価値ではなくて、自分の課題を解決していく場ができて、その手段が色々なところに散りばめられている。評価や協力もしてもらえ、自分の課題に集中できる。そんな場があれば、ドラえもんをつくるということに集中できるのではないかと考えています。

私の目的をもう一度申し上げます。ロードマップの続きを皆さんと描き、歩みたいのです。そして地方自治体が無理をしてはいけないと思うのです。国、企業、大学、個人が常に無理なく情報共有して連携することが立場に関係なく行われる。誰かの「助けて」という声が、その人を助けられる誰かにちゃんと届く、そういう場所を私は作りたい。この場でこのお話をすれば、これに近づけるのではないかと考えてお話をしています。

では、この環境ができたなら私は何をするかというと、もちろんドラえもんをつくることに集中します。私がドラえもんをつくるために最後にやらなければいけないことは、自分の役割からしっかりと手を離すことです。もちろん次にできる人を探すことや教育はします。

私は人工知能研究者でAIを作るのが得意で、色々な研究をしています。メンタリングのAI開発を企業と行って、自分のやりたいことを持論化する手法を考えていたり、OKRという目標管理手法に基づいて、あなたの目標だったらこの人とつながるといというマッチングを提案できるようなアルゴリズム、AIをつくり、地球の裏側にいる潜在的なパートナーに必ず出会える、そんな技術を作れると思うのです。ドラえもんをつくるという研究の中で貯めたノウハウで、秘書AIのようなものをつくって、管理とかモチベーションアップといったお手伝いができるということを目指しています。

こういうことを実現するために、研究室や研究センターの活動は全てデータとして貯まっていて、それを学習させるということが私たちの現場ではできています。

03 RINGS 92

RINGSでの大澤の役割の自動化

1. 1on1メンタリング
→ メンタリングAIの開発
(NECソリューションイノベータとの共同研究)
2. コミュニティの触媒
→ 目標(OKR)のマッチングAIの開発
3. タスク・プロジェクトマネジメント(必要な人のみ)
→ 秘書AIの開発

Copyright © Masahiko Osawa 2022

未来の未来という話から、中核市サミットのテーマである「ミライのその先」について、私の考えを述べます。

ドラえもんができたなら何してほしいですかと色々なところで質問されたり、したりして、その答えを聞いてきました。ひみつ道具で仕事を楽にしてほしい、ダメな自分を叱ってほしい、親の介護を代わってほしい、育児を手伝ってほしいなど、色々なことを言われたのですが、それを解決してほしいのは今なのではないか?と思うのです。ドラえもんができたなら何をしてほしいですかという質問は典型的なメンタリングのスキルによくある、発想を広げるための問いかけテクニックと同じ構造です。100億円を自由に使っていいとしたら何に使いますか、世界中が自分に協力してくれるとしたら何をしてほしいですか、無限に時間があったら何をしたいですかといった問いかけは、その時の行動が知りたくて聞いているのではなく、今の自分の足かせや課題が何なのかを明らかにして、それを外して考えると今の行動が変わってくるのではないかと気付かせる。それは100億円なくても10万円くらいあればできるとか、そういう発想を得たくする質問なのです。

04 ミライのその先へ 95

発想を広げる問いかけテクニック

「100億円自由に使って良いとしたら、何に使う?」

「世界中が自分に協力してくれるとしたら、何してほしい?」

「無限に時間があつたとしたら、何に時間をつかう?」

本当にそうなった時にやりたいことを見つける問いかけ

今の自分の「足かせ」をみつけ、外す問いかけ

Copyright © Masahiko Osawa 2022

こういう問いかけを考えていくと、未来のその先を考えた時に今が見えてくるのではないかと思うので

す。例えば、私はドラえもんをつくった後に何をしたいかと言われたら、児童養護施設のおじいちゃんになりたいといつも答えています。児童養護施設を経営したいとずっと考えてたのですが、これが私の未来のその先であるということは、きっと何か課題を感じているのです。最初は無意識だったのですが、その課題は何かと考えていくと、「一人一人に寄り添うことが難しい」というのが私の足かせ、課題だったのです。

私が散々言われてうんざりしている言葉があります。それは、「一人一人に構っていたらキリがない。たくさんの人を助けたいなら世界を変えろ。世界を変えて平均したらみんなが何となく幸せになっている。それが我々ができるみんなを幸せにする方法だ。」と言われるのです。

平均したらみんなが幸せになるけれど、平均なのでその変化で幸せになっていない人もいるけれど、仕方ないと言われるのです。世界を変えたいと思ったことはなかったのです。ましてや目の前の大切な一人を見捨ててまで変えたい世界などないはずと思っていました。でもこの言葉に関して、一人一人に構っていたらキリがないというのは、悔しいけれど正論であり、言い返せなかったのです。だからここに私の課題が詰まっていたという発見をしました。

例えば、一人に徹底的に向き合って一人を幸せにすることと、iPhoneを作って世界を便利にしたということは同じくらい素晴らしいことだと思っています。しかし、今の世の中では後者の方が高く評価され高く報酬がもらえるのが現状だと思います。合理性を求める、特にこの金融資本主義の世の中で、人に寄り添うエネルギーが枯渇しているのではないかと思うのです。

人に寄り添う時間を、iPhoneを作るとか世の中変えるといったことに使った方が価値が大きいと考える人が多いから、人に寄り添うことがどんどん領域として減っている気がします。今、誰もが「助けて」と言える世の中になっているかというのが私の問いとしてあります。『ドラえもん』ですごいなと思うシーンがあります。「助けてドラえもん」。冒頭1分で起こるあのシーンです。自分ではどうしようもない、解決できない課題に直面して、どうしていいかわからない時、普通はそこで物語が止まりませんか。どうしよ

うもないから、こっちには進めないと言って物語がストップする。でも、ドラえもんは、のび太の「助けてドラえもん」という一言で、物語が進んでいくのです。「助けて」という言葉を通して。それがすごいと思います。

どうしたらこれができるのかと考えると、ドラえもんはその1人に寄り添うテクノロジーだから、私がドラえもんをつくれれば、みんなに届けることができ、寄り添う力を世の中にたくさん届けることができるから解決できる。それは本当に嬉しいことだと思ったのですが、その未来は、今必要なもので、助けてほしいのは今なのです。私が22年後にドラえもんをつくるプロジェクトの完遂するまで待ってられないのです。

では、例えば市役所に「助けて」と言えば、みんな助けられるでしょうか。全員が「助けて」と言ってきたら、さすがにパンクします。今のRINGSも「助けて」という声が上がった時に助けられるように頑張ってるけれど、まだ完全ではない。そういう中で、未来が解決してくれるまで待とう、未来ではこういう課題がなくなるという先延ばしにしてしまうような気がする。まず、未来を考えたからこそ、未来のその先が見えてくるのだと思います。中核市サミットも、そういう趣旨で開催されていると思います。

一方で、未来のその先を考えたからこそ、今や未来が見えてくる側面もあると思います。今と未来とその先を行ったり来たりしながら、ロードマップの解像度を上げていくということを考えてきました。

04 ミライのその先へ 103

未来を考えたからこそ、未来のその先が見えてくる
未来のその先を考えたからこそ、今や未来が見えてくる

今と、未来と、その先を、行ったり来たりしながら、
ロードマップの解像度を上げていく

Copyright © Masahiko Osewa 2022

ドラえもんを本気でつくることは、未来のその先の話でしょうか。あらゆる立場の組織や個人が一つの生命体かのように連携している、そんな理想の姿は未来のその先の話でしょうか。やっぱりその未来は今なのではないかと思うのです。

未来予測という言葉から始めた今日の講演でしたが、当たらない、当てにならないということ多いです。

未来予測が甘えになってしまっていることはないでしょうか。30年後ぐらいには解決すると言いますが、その長い時間に甘んじていることはゼロではないと思います。でも、未来予測はそうあるべきではない。未来予測をしたから今はどうでもいいのではなく、この未来に行くという意志が未来予測だと私は思います。

今回の中核市サミットでは、「ミライのその先」を考えていくかと思います。その考えた未来のその先に意志は宿るでしょうか。その意志で今はどう変わりますか。未来のその先を考えたことで変わる私たちの行動は何か。そういうことを私は考えたいと思っています。

私は、ロードマップの続きを皆さんと歩みたいし描きたいのです。いつかではなく、今からやれることをいっぱいやっていきたいと考えています。

未来、そして未来の未来、そして未来のその先と色々な点を行き来しながらロードマップを描いてきました。私がプレゼンテーションをつくり、皆さんへのメッセージを考える中で、例えばRINGSと62の中核市がパートナーシップを結んで連携し始めたら面白いと思っています。理想論ですが、できなくはないような気がします。そして、「ともに『～』をつくる。」私はここにドラえもんという言葉を入れていますが、ドラえもんでなくてもいいと思うのです。幸せな市をつくるでもいいし、誰一人取り残さない未来をつくる、色んな『～』がある。今までの組織論とか協力関係は、同じ『～』を目指す人たち同士のチームワークを考えてきたのではないかと思うのですが、私たちのアイデアは逆です。全く違う『～』であっても、ともにすることができると私たちは思っています。それを皆さんとご一緒できたらいいと思っています。

05 まとめ 108

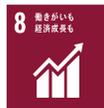
おわりに

- 「未来」「未来の未来」「ミライのその先」と色々な点を行き来しながら「ロードマップ」を描いてきた。
- いま起こったら面白いと思うこと
 - RINGSが62の中核市とパートナーシップを結ぶ

ともに●●●●をつくる

Copyright © Masahiko Osewa 2022

時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ



コーディネーター



名古屋大学 名誉教授
山田 基成 氏

名古屋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。博士（経済学）。名古屋大学大学院経済学研究科教授、同学国際経済政策研究センター長を経て、2020年退職。専門は、生産管理、中小企業経営。日本中小企業学会理事、愛知ブランド評価委員会委員長、愛知県産業労働計画策定委員会委員長等を歴任。2012年8月から豊田市産業振興委員会会長を務める。

コメンテーター



有志団体 Dream On 代表
中村 翼 氏

2009年、トヨタ自動車株式会社に入社し、量産車設計に従事。
2012年、業務外で有志団体CARTIVATORを設立し、空飛ぶクルマの開発を開始。トヨタグループ含む100社のスポンサー支援の下、日本初の有人デモフライトを達成。2018年に独立し、現在は起業家 兼 慶應大・空飛ぶクルマラボ特任助教。さらに、2021年より有志団体をDream Onと改称し、未来生活体験テーマパークの開発に挑戦中。

パネリスト



清元 秀泰 姫路市長



仲川 げん 奈良市長



上定 昭仁 松江市長

コロナ禍を契機としたデジタル化の急速な進行や、2050年カーボンニュートラルの実現に向け、積極的な温暖化対策を通じて、産業構造や社会構造の変革もたらされ、多くの産業もその在り方の転換が加速しています。

また、近年の人口構造の変化により、地域の産業を支える中小企業等においては、これまで培ってきた高度な技術の伝承や承継者不足などの問題も顕在化する中、イノベーションや新たな挑戦への機運醸成が求められています。

こうした中、地域の核である中核市は、新しい社会像や価値観の創出による産業の転換を的確に捉え、「産業のミライのその先」をイメージし、これまでの取組をアップデートしながら、自治体としてのあり方を描きなおす必要があります。

本パネルディスカッションでは、自治体としてこれらの産業変革とどう向き合うべきか、次世代の産業をどのように創出していくべきか、更に、実証実験等の先進的な取組の先にどのような「ミライのその先」を描くべきか、各市の事例発表を基に議論を深めました。

第1パネルディスカッションでは、脱炭素に向けた取組や少子化に伴う人口の減少といった、各市にて抱えている課題の中で新たな産業構造の変化にどう向き合い、これに適應し、産業のミライを築いていくのかということについて議論をしました。

まず姫路市長、奈良市長、松江市長から、それぞれの市における各市の先導的な取組について事例報告をいただき、コメンテーターの中村さんからのご質問にそれぞれの市長さんにお答えをいただくという形で議論を進めました。

姫路市の清元市長からは、脱炭素の未来に向けてということで、姫路市の顔とも言える姫路城とその周辺におけるゼロカーボンキャッスル構想、CO2の排出ゼロを目指した取組について報告がありました。あわせてカーボンニュートラルポート形成計画、つまり次世代エネルギーとしての水素や燃料アンモニウム、これが将来のエネルギーとして想定されるわけですが、こういったものの輸入、貯蔵に向けて産学官で連携をして取り組むという、地域全体での競争力強化に向けた意欲的な取組を報告いただきました。

続いて、奈良市の仲川市長からは、20歳代の若年層の市外流出や女性就業率の低さといった人口動態に関わることが課題で、それに対して外部からの企業誘致を積極的に行っているという事例の報告をいただきました。あわせて、奈良市は豊富な観光資源に恵まれておりますが、更なる魅力向上、あるいは先ほどの若者や女性の就業率を上げるために産業集積を更に図るため、企業との連携や高等教育機関との協力を積極的に進めているという取組も報告いただきました。

3番目に松江市の上定市長からは、松江市にしかない強みを確認した上で、松江は歴史ある多様な手仕事、物づくり文化が歴史的にあるのでこの資源を生かして、職人商店街創出という、これまでにないユニークな体験型の商店街を作りたいという試みについて言及いただきました。あわせて、循環型社会の構築に向けた松江循環プロジェクトの取組についても触れられました。松江は産業の転換を求め

られる時代にはあるけれども、松江の本来あるべき姿は、かつて財政難を立て直して産業を興された松平不昧公、これに端を発する温故知新が一番のスローガンであるというお話をいただきました。

その後、コメンテーターの中村さんから3市の市長さんにご質問をいただいて意見交換を、あわせて私からは各市の取組や産学連携の推進にあたって、どんな考え方を持っているかとお尋ねをさせていただきました。あわせて本日の大きなテーマであるミライのその先について、大澤先生の講演でもあったように未来予測は難しいけれども、それぞれの市においてミライのその先2040年、2050年、どういったことを考えているのかお尋ねいたしました。

事例報告からも、それぞれの市において、それぞれの市の強さ、持っている資源を活用されながら、大変意欲的に新たな産業創出に向けたチャレンジに取り組んでいるということはよく分かりましたし、行政が主導して産業界、教育機関あるいはそれ以外の多様な組織との連携にどう取り組んでいくのかがポイントであり、色々な工夫をしていらっしゃるということが確認できました。

最後にあたり、私のまとめとして、やはりミライのその先は予測しにくいけれども、2040年、50年に自分たちの町はこうなっていきたいという理想の姿を描かないと、目指すものが分からないのではないかと。そういう意味ではやはり若い人の力を借りながら、ぜひ、2040年、50年の我が町の姿をまずは描いていただく、できるだけ具体的に描いていただく、それが重要だと思います。

現在の日本の状況では、人手不足になることは目に見えていますので、やはり既存の人材の活用をするための学び直し、リスキリングとあわせて、2040年、50年の日本は日本人だけではなくて色々な国籍、人種の方からなる集団で新たなイノベーションにチャレンジしていくことが重要ではないかと申し上げて、第1パネルディスカッションのまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

多様なつながりと描く地域共生社会のミライ



コーディネーター



同志社大学 社会学部 教授
永田 祐 氏

上智大学文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士(社会福祉学)。市町村における包括的支援体制の構築や権利擁護支援について研究するかたわら、社会福祉士として成年後見活動も行う。厚生労働省 成年後見制度利用促進専門家会議、地域における住民主体の課題解決力強化・相談支援体制の在り方に関する検討会構成員、2020年には豊田市地域福祉活動計画策定委員会委員長を務める。

コメンテーター



日本大学文理学部情報科学科助教/
次世代社会研究センター センター長
大澤 正彦 氏

東京工業大学附属科学技術高校、慶応義塾大学理工学部をいずれも首席で卒業。博士(工学)。学部時代に設立した「全脳アーキテクチャ若手の会」が2,500人規模に成長し、日本最大の人工知能コミュニティに発展。IEEE Young Researcher Awardをはじめ受賞歴多数。孫正義氏より選ばれた異能を持つ若手として孫正義育英財団一期生に選抜。日本認知科学学会にて認知科学の若手の会を設立。

パネリスト



太田 稔彦 豊田市長



柴橋 正直 岐阜市長



後藤 圭二 吹田市長

我が国の社会保障制度は、近年の人口構造の変化により、「従来の福祉を超える新しいステージ」を迎えたとされ、地域においては、家庭・学校・職場といった人々の生活領域における支えあいの基盤が弱まり、社会的に孤立する人や、制度の狭間の課題や複合課題が顕在化しています。

こういった社会構造の変化を背景に、「支える側・支えられる側」といった従来の関係を超えて、地域のあらゆる住民が役割を持ち、助け合いながら暮らしていく「地域共生社会」の実現に向けて、各市でも様々な取組が進められています。

一方、新しいテクノロジーやイノベーションの創出は急速に進み、年齢、性別、障がいの有無などに関係なくシームレスな生活を送ることができ、さらには「地域」という枠を超えたつながりを持つことが容易となるミライが現実のものとなりつつあります。また、昨今のコロナ禍は、従来の「人々のつながり」や「地域」の概念が変わりつつあることを実感するきっかけにもなりました。

本パネルディスカッションでは、中核市の先進的な取組を共有し、社会の変化に伴って生じる課題と、多様なつながりから生まれるこれからの可能性の両面から、「地域共生社会」のミライのその先をどのように描くべきか、議論を深めました。

第2パネルディスカッションでは、地域共生社会のミライについて、豊田市長、岐阜市長、吹田市長から様々な連携に関する先進事例をご報告いただき、テーマに沿って議論を進めました。

豊田市の太田市長からは、住み慣れた地域の中で社会との関わりを持ちながら、誰もが安心して自分らしく暮らしている状態である幸福寿命という概念をご提起いただき、それを目指した取組をご紹介いただきました。1つ目は民間のノウハウやアイデアを活用し、市民の多様な自立や参加のあり方を実現していく参加支援の取組です。2つ目は、本人の意思を尊重しながら判断能力が不十分になっても、自分らしく暮らせるよう支援をしていく権利擁護支援のモデル事業の取組についてご紹介いただきました。更にソーシャルインパクトボンドを活用した取組や先進の医療の取組など、誰一人取り残さないまちづくりにつなげていく多様な取組をご報告いただきました。

岐阜市の柴橋市長からは、幸せを実感するためには居場所と出番が必要であり、社会で働くことを土台とするまちづくりを進め、誰もが幸せを実感できるまちづくりをしていきたいという市長の思いをご説明いただき、3つの事業をご報告いただきました。1つ目に超短時間雇用創出事業により多様な働き方の選択肢を増やす取組。2つ目にテレワークを活用したショートタイムワーク事業により、場所や時間に縛られない雇用スキームも構築して育児と介護、仕事を両立できるような取組。3つ目にワークダイバーシティの実証化モデル事業により、働きづらさを抱えているような方の就労と自立を支援する環境を実現していく取組です。一方、例えば手帳はないけれど障がい者が疑われる方への支援など現状の制度の課題についてもご提起いただき、参加者の皆さんと共有をいたしました。

吹田市の後藤市長からは、地理的につながる西宮市、尼崎市、豊中市、吹田市の4市の連携の実践から、県境も越境してフレキシブルにつながりをつくっていくことが、柔軟な発想と様々な社会課題の解消の促進剤となるということをご報告いただきました。競争ではなく、柔軟に連携できるつながりが重要だという考え方は地域共生社会をつくっていく際

にも重要なキーワードになると感じました。

コメンテーターの大澤先生からは、基調講演でもお話のあったウニ型組織から、組織のあり方についてお話いただき、地域共生社会を実現していくための組織論の一つとして、私も大変共感してお聞きしました。加えてパネルディスカッションの中では、新しい技術の活用の具体的なアイデア、地域共生と新しい技術の掛け算のアイデアをご報告いただきました。

私は地域共生社会のキーワードの一つは、「越境とのりしろの重ね合わせ」と考えており、まさにそういった議論ができたのではないかと考えています。豊田市の参加支援の取組、岐阜市のワークダイバーシティの取組は様々な困難があっても、地域に居場所があることで幸せの実感につながる取組だと思います。こうした取組は、行政だけではなく、多様な主体がお互いののりしろを重ね合わせていかなければ実現できません。幸せの形は様々ですので、多様な形で居場所や地域の役割もつくっていくかなければいけない。そのためには多様な人とつながって、多様な人と一緒につくっていくことが重要です。こうした場が増えていくことで、社会的孤立のような新たな生活困難の解決につながる未来を展望することができました。また、吹田市の一つの市だけで実現することが困難でも、お互いに連携して足りないところを補い合うという発想も同じだと感じました。これまでの発想を越境してつながっていくことで、新しい未来の可能性が開けていくという未来を感じました。新しいテクノロジーやイノベーションの活用が、その選択肢をさらに広げてくれることも未来の可能性だと考えます。

最後に、中核市の皆様には、これまでの既成概念にとらわれることなく、様々な分野の団体や人をつなげていくプラットフォームとしての役割をぜひ担っていただきたいと思っています。そして職員の皆さんには、これまでの縦割りの境を越えて発想し、つながって、大澤先生の言葉でいえば、地域共生社会を本気で作ることにぜひ取り組んでいただきたいと感じました。以上で、第2パネルディスカッションの報告とさせていただきます。ありがとうございました。

中核市サミット豊田宣言2022

中核市は、地域の中核都市として、地方分権の推進と地域の発展に大きな役割を果たしてきました。

デジタル化や脱炭素といった変革とイノベーションの進展による新たな手法や価値が創出され続ける中、私たち中核市は、これまで描いてきた「ミライ」の実現に向けて、新たな価値基準への転換を進めるとともに、将来にわたって持続可能なまちづくりを進めていくために、「ミライ」のさらに「その先」を描きなおす、重要な時期を迎えています。

本サミットでは、「多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ～中核市が描く『ミライのその先』～」をテーマに、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」、「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」に焦点を当てて議論を行い、次のとおり、全国の中核市が連携して取り組むこととしました。

- 1 産業構造の変革や人口減少などの社会の変化への適応が求められる中、私たち中核市は、多様な主体との連携のもと、新しいモノや考え方と豊かな地域資源を融合しながら、時代の変化にしなやかに適応した「産業のまちづくり」を推進し、持続・発展し続ける産業のミライのその先を目指します。
- 2 人々の価値観や生活様式が日々変わりつつある中、私たち中核市は、市民の幸せを実現するために、その変化に向き合うとともに、多彩な主体の力を重ね合わせ、生かし合うことで、多様なつながりと描く「地域共生社会のまちづくり」を推進し、誰もが幸せを感じながら生きるミライのその先を目指します。

中核市62市の人口は約2,275万人となり、全国における存在感と地方自治の理念の実現に向けた中核市の責任は、今後もより一層大きくなっていきます。

私たち中核市は、それぞれの地域の特性を生かしながら、ともに連携協力して以上の取組を推進し、多様な主体とつながり、時代の変化に適応した持続可能なまちづくりを推進することで、日本の明るい「ミライのその先」を描いていくことを、ここに宣言します。



令和4年10月27日
中核市市長一同

▶ 次回開催市挨拶

宇都宮市副市長

酒井 典久

宇都宮市副市長の酒井でございます。本来であれば、宇都宮市長の佐藤栄一がこちらに参りましてご挨拶申し上げるところでございますが、今週末から「全国障害者スポーツ大会 いちご一会とちぎ大会」が開催されます。公務都合により出席できませんので、私が代わりにご挨拶させていただきます。

まずは、本年10月1日から11日にかけて宇都宮市をはじめまして栃木県におきまして、3年ぶりに「いちご一会とちぎ国体」が開催されました。全国から宇都宮市にも多くの皆様にご参加、ご来場いただきました。この場をお借りいたしまして御礼を申し上げます。

それでは「中核市サミット2023 in 宇都宮」の開催につきましてご説明いたします。来年度のサミットは、令和5年11月1日、2日の2日間で開催を予定しております。会場は、今年の11月30日に開館を予定しておりますJR宇都宮駅直結の交流拠点施設、名称が「ライトキューブ宇都宮」です。この施設につきましてはJR宇都宮駅新幹線改札口からメインエントランスまで、上下の移動なしで徒歩2分で連結しております。アクセスや利便性が優れた会議中心型のコンベンション施設でございます。

また、宇都宮市におきましては、誰もが豊かで便利、安心して暮らせる夢や希望が叶うまちの実現を目指しまして、次世代型路面電車LRT（愛称ライトライン）を基軸として、公共交通と一体となった魅力あるまちづくりに取り組んでいるところであります。

令和5年8月には、このLRTが運行開始予定となっておりますので、中核市サミットで本市にお越しいただいた際には、ご乗車いただきたいと考えております。

サミットの全体スケジュールにつきましては、おおむね例年通りとなりますが、今回の豊田市サミットを参考にさせていただきながら、内容を検討してまいります。

現段階ではサミットのテーマや内容が決まっておりますが、中核市が抱える共通の諸課題について議論を深めるために、また宇都宮市の魅力を感じ、楽しんでいただけるサミットにしたいと考えております。皆様のお越しを心からお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



中核市市長会副会長 大分市長

佐藤 樹一郎

皆様こんにちは、大分市長の佐藤でございます。

「中核市サミット2022 in 豊田」の閉会にあたりましてご挨拶を申し上げます。本日までご出席をいただきました皆様、長時間に渡りまして誠にありがとうございました。そして基調講演、パネリスト、コーディネーター、コメンテーターをしていただきました皆様、心から感謝を申し上げたいと存じます。

大澤先生の若く、斬新な発想に触れまして、また市長さん方の発表を聞きながら、同じ悩みだなと思いつつ、その解決策が私の思いもなかった新しい角度からの多様な取組をご紹介いただき、本日は大変触発され、勉強になったサミットとなりました。

そして、今回サミットを開催していただきました豊田市の太田市長さんをはじめ、豊田市の職員の皆様、本当にありがとうございました。コロナ禍の中、大変いろいろなご苦勞があったと思いますが、皆様のご尽力のおかげで素晴らしいサミットとなり、大成功を収めることができました。今日参加しました皆様を代表しまして心から感謝を申し上げたいと存じます。

本日のサミットを契機といたしまして、先ほど採択されましたサミット宣言の通り、私ども62の中核市の連携を基としまして、本サミットのテーマでございましたミライのその先を見据えたまちづくりに一緒に

なりまして取り組んで参りたいと考えております。

来年は、宇都宮市でのサミットの開催となります。皆様と宇都宮で再びお会いできますことを楽しみにしております。

結びに、全国62中核市の今後ますますのご発展と本日までご参加いただきました皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



▶ 会場写真



■会場入り口にアルコール噴霧機を設置



■サーモグラフィーカメラによる検温を実施



■登壇者席に飛沫防止パネルを設置



■豊田のイチオンおみやげの販売



■記念撮影コーナー



■デジタルサイネージによる中核市ポスター展示



■来場者向け配布物



■とよたPR大使

▶ 開催概要

- 1) 日程 令和4年10月27日(木)
- 2) 場所 名鉄トヨタホテル(愛知県豊田市喜多町1-140)
- 3) テーマ 多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ
～中核市が描く「ミライのその先」～
- 4) 基調講演
演題 未来の未来を探る～AI・組織・コミュニケーションの視点から～
講師 日本大学文理学部情報科学科助教/次世代社会研究センター センター長 大澤 正彦 氏
- 5) パネルディスカッション
【第1会場】時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ
＜コーディネーター＞ 名古屋大学 名誉教授 山田 基成 氏
＜コメンテーター＞ 有志団体 Dream On 代表 中村 翼 氏
＜パネリスト＞ 姫路市長 清元 秀泰/奈良市長 仲川 げん/松江市長 上定 昭仁

【第2会場】多様なつながりと描く地域共生社会のミライ
＜コーディネーター＞ 同志社大学社会学部 教授 永田 祐 氏
＜コメンテーター＞ 日本大学文理学部情報科学科助教/次世代社会研究センター センター長 大澤 正彦 氏
＜パネリスト＞ 岐阜市長 柴橋 正彦/吹田市長 後藤 圭二/豊田市長 太田 稔彦
- 6) 参加者数

区分	計	市長会関係者			市議会議員関係者		来賓等関係者	
		市長	副市長	随行者	議員	随行者	来賓	来賓随員
中核市	448人	31人	20人	113人	267人	9人	4人	4人
候補市	18人	—	—	10人	8人	—	—	—
その他	24人	—	—	4人	—	—	12人	8人
計	490人	31人	20人	127人	275人	9人	16人	12人

中核市サミット2022 in 豊田 報告書

2023年3月発行

【発行】中核市市長会豊田市サミット開催事務局（豊田市 総務部 行政改革推進課内）
〒471-8501 愛知県豊田市西町3-60
TEL:0565-34-6652 FAX:0565-34-6815
E-mail:gyoukaku@city.toyota.aichi.jp